

## 新潟大学大学院医歯学総合研究科産婦人科学教室

- ◆ 明治43年4月 官立新潟医学専門学校開校（付属病院：5科目6診療科）  
初代校長：池原康造
- ◎ 明治44年4月 産婦人科学・足立捨次郎教授就任（初代教授）  
京都大福岡医科大学助教授より  
大正元年（明治45年）足立捨次郎教授が欧米留学中，大坪武之助講師が医長及び産婦人科教授を務めた  
大正10年4月 足立捨次郎教授退任（京都足立産婦人科病院副院長となる）
- ◎ 大正10年10月 上野道故教授就任（第2代教授）満鉄大連病院副院長より
- ◆ 大正11年4月 官立新潟医科大学開学 学長：池田廉一郎  
大正13年7月 上野道故教授退任（健康上の理由）
- ◎ 大正13年8月 中山栄之助教授就任（第3代教授）  
東京警察病院副院長（東京大講師）より
- ◆ 昭和24年 新潟大学開学，官立新潟医科大学は国立新潟大学医学部となる  
初代学長：橋本 喬  
昭和25年 中山栄之助教授は付属病院長となる  
昭和28年 日本産婦人科学会総会を主催  
昭和38年3月 中山栄之助教授定年退官
- ◎ 昭和38年8月 鈴木雅州教授就任（第4代教授）東北大産婦人科助教授より  
昭和46年3月 鈴木雅州教授は東北大産婦人科教授に転任
- ◎ 昭和46年3月 竹内正七教授就任（第5代教授）東京大産婦人科助教授より  
昭和56年5月 日本産婦人科学会総会を主催，また日本癌治療学会総会も主催  
昭和63年3月 竹内正七教授定年退官
- ◎ 昭和63年8月 田中憲一教授就任（第6代教授）
- ◆ 平成13年4月 新潟大学大学院医歯学総合研究科設置
- ◆ 平成16年4月 国立大学法人・新潟大学発足  
平成18年4月 田中憲一教授は日本産婦人科学会総会を主催

# 新潟大学医学部産科婦人科学教室の一〇〇年

## 一、教室の沿革

明治四十三年（一九一〇年）九月官立新潟医学専門学校の産科婦人科学教室として発足し、福岡医科大学助教授であった足立捨次郎先生を初代教授として開講した。以来上野道故教授（大正十年（一九二一年）八月～昭和十三年（一九三八年）七月）、中山栄之助教授（昭和十三年（一九三八年）七月～昭和三十八年（一九六三年）三月）、鈴木雅洲教授（昭和三十八年（一九六三年）八月～昭和四十五年（一九七一年）三月）、竹内正七教授（昭和四十六年（一九七一年）四月～平成元年（一九八九年）三月）の歴代教授を経て、田中憲一教授（平成元年（一九八九年）八月～）が現在に至るまで教室を主宰している。

## 二、活字と写真で振り返る各教授時代の変遷

足立捨次郎初代教授時代（明治四十三年九月から大正十年四月）

（一九一〇～一九二一）

初代足立捨次郎教授は明治

四十三年九月に産婦人科初代教授として任命され、それと同時に外国留学をされたため、大坪武之助講師が福岡医科大学から赴任し、



足立 教授  
足立教授



新潟医学専門学校正門  
官立新潟医学専門学校正門、M43～T11頃、  
新潟市医師会史より



官立新潟医学専門学校正門、T3年度卒業アルバムより

足立教授不在中の産婦人科学教室の主任として教室を主宰し、実質上の産婦人科学教室開祖と目されている。

大正三年一月、足立教授の帰国と同時に代理役の大坪講師が辞職され、島根県に開業された。足立教授は事実上大正三年一月から大正十年四月まで勤務されたが、何もかも不足だらけの教室を完成するためにあらゆる苦心をされたことは後述の上野教授の「思い出」にある通りである。



婦人科手術

足立捨次郎教授

大坪武之助教授

産婦人科診察室



T3年度卒業アルバムより



附属病院遠景、T3年度卒業アルバムより



患者控室

病院事務室

伝染病隔離室

看護婦寄宿舍

附属病院前庭

T3年度卒業アルバムより



産科模型演習、T3年度卒業アルバムより



仮分娩室、T3年度卒業アルバムより



野口英世博士と新潟医学専門学校教授陣（大正4年10月26日訪校の際撮影）

新潟大学医学部五十年史より、前から2列目左端に足立教授

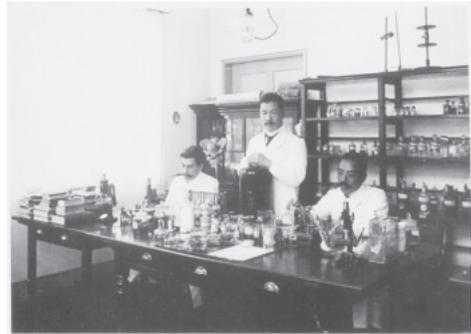


新潟医学専門学校附属病院産婆養成科第五回卒業記念 (大正8.4.10)

新潟大学医学部五十年史より、前列左から  
3番目足立教授、産婆養成科学生らと



産婦人科標本室、T3年度卒業アルバムより



産婦人科研究室、T3年度卒業アルバムより



産婦人科手術室外景、T7年度卒業アルバムより



分娩室、T7年度卒業アルバムより



婦人科手術の様子、T7年度卒業アルバムより



産婦人科手術室の様子、T7年度卒業アルバムより

上野道故教授（大正十年八月から昭和十三年七月）

（一九二一—一九三八）

初代足立教授の後任として満州  
鉄道大連病院産婦人科医長から医  
専教授として上野道故教授が赴任  
した。上野教授が新潟医専に着任  
されたのは大正十年八月で、上野  
教授の初めての新潟の印象は「当



上野教授

時の新潟市は今の如く繁華なる町ではなく、勿論道路はどこも舗  
装などされて居らない。街は極めて狭く且つ暗い、人口は約十万  
と云って居りました。駅へ着いてポロポロの一台の幌自動車を  
やっと手に入れて之に乗り込みました。」と記されている。また  
当時の教室の様子については、「現在の外来診療所のある建築の  
中には婦人科教室と婦人科外来診察室とが全部含まれて居りまし  
た。即ち現在のレントゲン室は教授室兼図書室、教授室は組織研  
究室兼医局、物理療法室は検尿検便等の検査室でありました。宿  
舎附属の板張のバラック食堂であったものを貰って来てそれを婦  
人科教室の費用で壁をつけて婦人科の看護婦室としましたので、  
初めは之を婦人科の建築の坪数の中へ計算しないこととしてあり  
ましたが、数年前にこの看護婦室はある年限の後に看護婦室とし  
て本建築に改築する事を教授会にて承認せられました。それから  
現在の浴室も材料室も共に当時は廊下であったものを後に改造し  
たものであります。其後、教室の建築狭隘のため転々として室の  
移転をなし、昭和二年婦人科研究室の新築落成するに到り漸く落

付く事が出来ました。ここに一つ説明しておかねばならぬ事は婦  
人科の病室に限り廊下が広々として居るに拘らず病室の奥行が甚  
だ浅くてベッドを二列に並べると其の間を通行する事は不可能で  
あるというのはどう云う訳かと不審に思ったが、之は足立教授の  
大なる苦心の存する処であったと云う。と云うのは婦人科には当  
時専属の手術室がなく、いつも外科のを借りてするので手術をす  
るには先ず先方の御都合を伺って後でなければ決定する事が出来  
ないので不便の上もないと云う有様でした。それがために如何  
なる辛棒をしても何とかして専属の手術室が欲しいというのが足  
立教授の心願であった。ところが病室及び分娩室一棟だけが予算  
通過したが、あとの手術室は何時建つか全く解らないと云う形勢  
であった。そこで百万研究したあげく終に苦肉の一策を案出し  
て、病室の幅を若干けずり落して幅の狭いものとして、病室建築  
用として通過した予算を以て病室一棟及び分娩室一棟と手術室一  
棟とを併せて建築したのであった。さてこそ鰻の寝床然たる細長  
い病室が出来上った訳だと。いわれ因縁を聞いてみれば足立教授  
が如何に苦心されたか想像に余りあるのであります。出来た手  
術室は専門学校には過ぎたもので、私一代は何の不自由もなく自  
由に手術をやる事の出来たのは全く足立先生の御蔭と深く感謝し  
て居ります。」

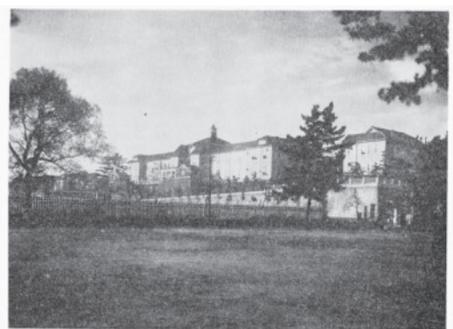
上野教授の思い出話はこの他あらゆる方面に涉っているが、当  
時の分娩の状況を知る面白い文がある。「学生の教授上遺憾に感  
じたことは産科実地見学に就てであります。当時は実習用官費入  
院分娩は極度に少なく漸く一年間に五〇前後を数えるのみ。その

主なる原因は一、見学用に供せられる事を極度に嫌う傾向あること。二、外部に於て悪宣伝をなすものがあるため。でありました。当時は、死ぬ覚悟なら医専に入院して分娩するがよからう、とか又、学生のおもちゃになってもよいのなら入院分娩せよ、などと悪い宣伝を耳にする事は稀ではなかった。その後、産婦の獲得に努め種々なる方法を講じたが、何分にも小都会で市内の分娩数も少なく、且種々なる事情があつて意の如く多数の入院分娩患者を得る事が出来ずして現在に至りました。ある夜の事です。所要あつて登院しました所、偶々官費分娩ある由にて、分娩室を覗いた所、分娩台の周囲には黒山をなして多数の頭が集合しているの  
 で不審に思つて、何事があつてかくも大勢が集つているのかと看護婦に尋ねたところ、今回に限らず官費の入院分娩のある時は凡そこれと同様であります。と云う返事であつたので『あの沢山の人は何人か』と重ねて尋ねたのに『学生は只二人のみであります  
 が、其他は当教室の医員及び他科の当直医であります』との答であつた。そこで何故に他科の当直医迄が分娩時に臨席するのかと尋ねた所、卒業生は在学中には分娩の見学出来なかつたものが多く、そのため卒業後に他科の医員として当直中に官費分娩があると聞くと、この機会を利用して見学しようと方々から集つて来て、婦人科当直医の制止もきかずして分娩室に入り込むのである  
 という事が解りました。」当時の分娩室の状況が偲ばれて面白い。  
 また当時は手術室は照明に適當の設備がなく甚だ困つていた。  
 上野教授が昭和二年欧州に行かれた時、ツァイスに行き一七〇〇マルク（現在の日本円に換算するとおよそ二〇〇万円前後と思わ

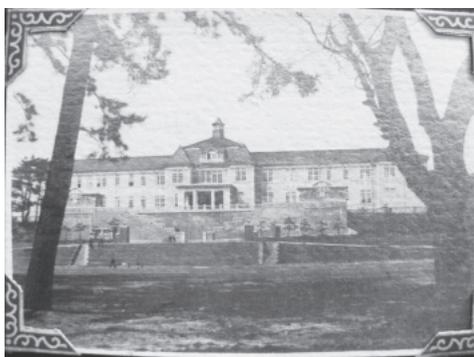
れる）を出して無影燈を購入し、教室に送らせたが、これが日本に輸入されたツァイス無影燈の最初のものであつた。

足立教授が退職されて暫くは医専第一回卒業生の満谷珠一氏が助教として教室を取り仕切り、満谷助教が大正十一年三月辞職されてからは、石田与吉氏が講師、助教として、三林隆吉氏が助教として大正十五年五月赴任されるまで働いておられた。

上野教授は昭和九年頃から身体をいたためられ、昭和十年に催された日本婦人科学会には随分無理をされ、その後はほとんど教壇に立つことも稀となり、昭和十三年定年にならずに退官され、それとほとんど時を同じくして三林助教は京大教授として母校に帰られた。



昭和4年頃の新潟医科大学附属病院遠景  
 新潟大学医学部五十年史より、S4年頃附属病院遠景



S3年頃、附属病院玄関、村井惇先生より



S3~7年頃、上野教授と医局員、村井惇先生より



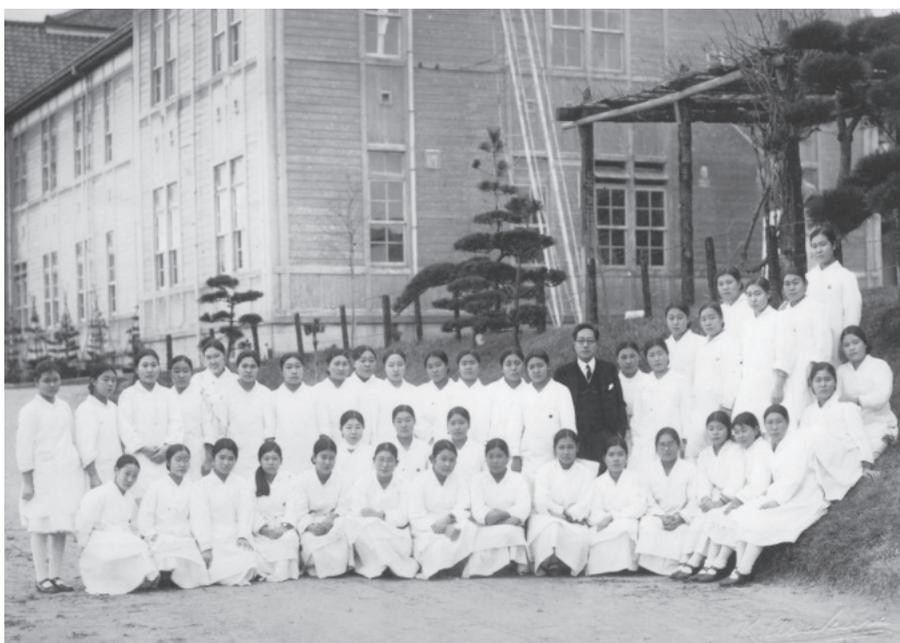
S3年頃、附属病院入口石段、村井惇先生より



S3~7年頃、医局対抗運動会、村井惇先生より



S3年頃、手術室遠望、村井惇先生より



S3~7年頃、産婆養成科学生？、村井惇先生より



S3~7年頃、村井惇先生より  
集合写真（詳細は不明）

S3~7年頃、村井惇先生より  
集合写真（詳細は不明）



S3~7年頃  
上野教授（前列右から4人目）  
三林助教授（同右から3人目）  
村井惇先生より

撮影年不明、  
上野教授（前列左から4人目）、  
村井惇先生より



撮影年不明、  
上野教授（前列右から4人目）、  
村井惇先生より

撮影年不明、  
上野教授（前列左から4人目）、  
村井惇先生より





S4年、医局対抗運動会、応援団長の雄姿  
村井惇先生より



S3年、医局対抗運動会、村井惇先生より



S5年、医局対抗運動会、村井惇先生より



S5年、医局対抗運動会、「ウテルスシュワングル踊」  
村井惇先生より

S3年頃、上野教授（右）、三林助教授（左）  
村井惇先生より



S7年頃、送別会、産婦人科研究棟前  
上野教授（前から2列目、左から3人目）、村井惇先生より



前写真の拡大

中山栄之助教授時代（昭和十三年八月から昭和三十八年三月）

（一九三八—一九六三）

上野教授退官のため、東大講師、東京警察病院医長であった中山栄之助先生が後任教授として昭和十三年八月来任された。

教授御赴任当時の医局の模様について第一番の弟子である渡辺堅



中山教授  
中山教授

治氏は次のように書いている。「今迄上野教授の京大系の医局に対し、今度は中山教授の東大系となると教室内外の様相が一変するのではないか、ひいては残っている医局員の去就にも重大変化を来しやしないか、或は又診察面に関しても例えば東大は内診の手は右手を使うのに対し、京大は左手だ。婦人科医にとってこの内診指の人差指こそ我々の眼にも相当する貴重なものだ、この慣れた内診法を今度は右手にせねばなるまい。我々は皆最初から左手で内診する様に習って習慣づけられて来た、人間の慣れと云うものは恐ろしいもので、試みに右手でやってみても、さっぱり呼吸が合わぬ。何かゴコチナイ気がして、やたらに左手が疲れるばかり、一向に駄目だ。かれこれしている間に七月に入り、いよいよ中山教授来任される日が近づいた。いよいよ教授を迎える日が来て我々への御訓示第一話は『自分は上野教授の跡をついでこの教室へ来た。自分は新潟医科大学産婦人科教室のために来たので、東京系だとか京都系だとか云うことは聊かも意にしていな

きたい。日頃自分がモットーとしている、強く、正しく、朗かに、の三是に心掛けて進んで貰いたい』と結ばれた。先生は先ず何よりも、熱と力と若さをもって着々我が産婦人科教室の内外の発展を計られた。即ち教室内に対しては先ず外来の整備改善、教授室の移転、これこそ我々医局員が一番喜んだ、と云うのは当時教授室は現在の第四研究室で、医局、研究室と同一棟だ、いくら慈愛あふるる医長だと云う手も矢張り我々には、こわいオヤジだ。この教授室が今度いく大声で嘸鳴つても聞えやせぬ遙か外来の一番奥への移転だ。而も驚いた事には教室の改造だけでなく、医局の眼の前にある第一内科の病室の一部迄移転させて仕舞われた。即ち医局のすぐ目の先一間程のところに第一内科の病室の便所があり、夏なんか臭気粉々、全くやりきれない状態であったのを中山教授は現在の位置におしやられてしまった。一方又、研究室、実験室の整備、最新式の実験器械の購入、我々医局員には夫々細かく病室、研究室の仕事に分けられ、責任を持たされると同時にテーマを与えられて一人一人毎に丁寧な御指導、御鞭撻をして下さったものだ。」というように教授の交代は医局員には大変のことだったろうが、それも無事に終わり、それまでは臨床経験を第一にとり主義が活発なアルバイト主義に変わり、中山教授のテーマである「産婦人科手術患者の病態生理」ということに関し

て全員が猛進していた。昭和十七年中山教授は日本産科婦人科学会の宿題報告を担当されていたが、不幸にも病に倒れ終戦の年まで休養されることになった。



撮影年不明、中山教授  
佐々木繁先生より

その間は昭和十四年三月に東大から赴任された梅沢助教授が全責任を負って外来、講義、診療と大活躍をされた。梅沢助教授は昭和二十五年四月に群馬大の教授となって赴任された。梅沢助教授の後任には板垣助教授が一年程勤務したが、昭和二十七年七月開業のため退職されたので、それまで通信病院にいた小坂氏が助教授として迎えられた。

第二次世界大戦のため、医局員は次々と応召し、おまけに教授には倒れられ研究は一時全く中止のやむなきにいたったが、終戦と共にぼつぼつ医局員も帰り、教授もすっかり健康を回復され、再び盛んな研究時代が訪れた。

昭和二十四年、仙台市で開かれた産科婦人科学会総会において宿題報告として立派に実を結び多大の感銘を与えた。

昭和二十七年九月、教授は渡米され約半年の旅を終えて帰られると間もなく、昭和二十八年五月、第五回日本産科婦人科学会総会が三、〇〇〇人の会員を集めて盛大に新潟に催され、其の盛大さは長く語り草となった程であった。教室も発展の一途をたどって来たことはまことに目ざましいものがあるが、ただ第二次世界大戦という未曾有の大戦の為に教室から応召した医局員の中、高橋与一氏を始めとして村山、歌川、幸田の諸氏が戦死されたことはまことにいたましいことであった。

終戦前後は物資もなく、人員もなく、おまけに疎開騒ぎで診療、研究は甚だ不振の状態であったが、混乱もおさまると共に昔日にも増して研究は盛んとなり、アルバイトを完成さす人が続出し、医局員も四十人を超過するという産婦人科教室黄金時代が出現したのである。

分娩患者にしても上野教授時代患者を紹介する者には賞まで出したというのに、現在はとうてい希望者を全部受け入れきれず、予約制をとって半年も前から締切るといような状況であった。



附属病院外来棟、S29年度卒業アルバムより

附属病院火災（S26/11/12）、S28年度卒業アルバムより



附属病院火災（昭和26年11月12日）



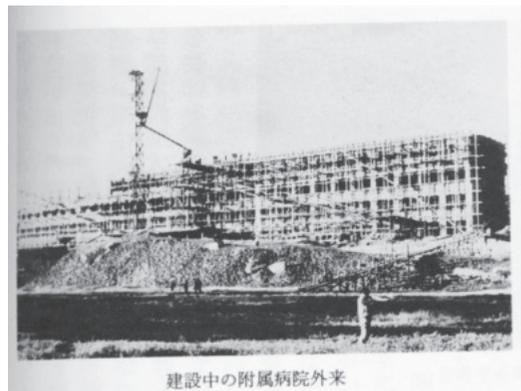
附属病院火災（昭和26年11月12日）

附属病院火災（S26/11/12）  
新潟大学医学部五十年史より



復興した附属病院外来

S31年3月に外来棟完成、新潟大学医学部七十五年史より



建設中の附属病院外来

S28年3月～再建開始、新潟大学医学部七十五年史より



S33年度卒業アルバムより



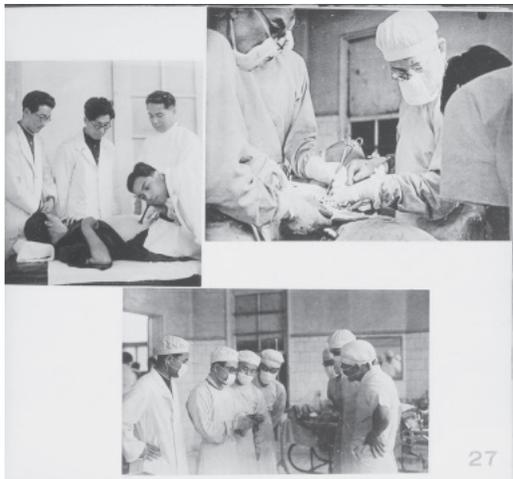
S31年、新潟大学医学部七十五年史より、  
医学部全景、手前に新外来棟



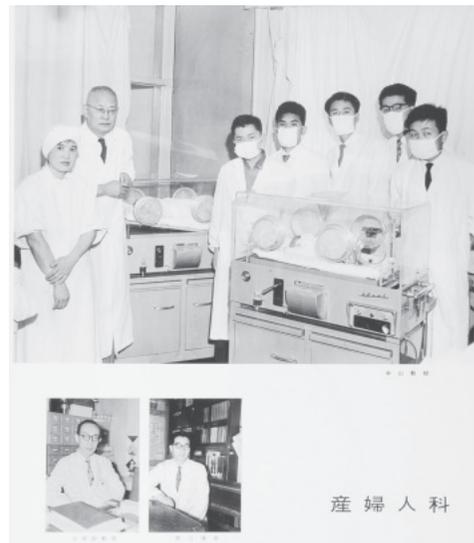
中山教授、小坂助教授、野口講師、中山教授とポリクリ学生  
S34年度卒業アルバムより



医学部本館、S32年度卒業アルバムより



執刀中の中山教授（右上）  
S25年度卒業アルバムより



中山教授とポリクリ学生、新生児室にて  
S37年度卒業アルバムより

中山教授外来診察（上）、新生児沐浴（下）  
S28年度卒業アルバムより



S32年日産婦学会札幌、中山教授  
山田昇先生より



S35年中山教授謝恩会、山田昇先生より



S36年医局旅行猪苗代、集合写真、中央に中山教授  
佐々木繁先生より



S36年医局旅行猪苗代、バス車内、中山教授  
佐々木繁先生より



S36年医局旅行猪苗代、宴会光景、中山教授（左）  
佐々木繁先生より



S36年医局旅行猪苗代、集合写真、中央に中山教授  
佐々木繁先生より



S36-37年頃、産婦人科手術場閉鎖のお別れ会  
佐々木繁先生より



S36年医局旅行猪苗代、宴会光景、中山教授（右）  
佐々木繁先生より

鈴木雅洲教授時代（昭和三十八年八月から昭和四十六年三月）

（一九六三—一九七二）

鈴木教授は、当時としては新進気鋭であり、専門の生殖生理学、内分泌学を中心に広く産科婦人科学の諸問題を研究するため研究室、動物舎の整備、最新の実験装置の設置等精力的に野口正助教



鈴木教授  
鈴木教授

授、岡村泰講師らと共に研究の基盤を築かれた。昭和三十九年、旧研究室のとりこわしに伴い、現在の入退院玄関前にあった木造の旧病棟に研究室が移転、また旧病棟は新築された鉄筋建の西病棟へ婦人科、玄関棟へ産科が移転した。外来診療においては特殊外来として中山教授時代に加えられた不妊外来の他内分泌外来、腫瘍予防外来、血液外来および自律神経外来が新設された。

昭和三十九年六月未曾有の新潟地震によって多大な打撃を被るも、地震後まもなく日本不妊学会関東地方部会を主催され、渡辺重雄助教授の日本産科婦人科学会北日本連合地方部会（以下北日本学会）特別講演「性ホルモン分泌の中枢性支配に関する研究」をはじめ多くの学会発表がなされた。

昭和四十年渡辺助教授の辞職に伴い後任に鈴木正彦講師が昇任された。同年広井正彦助手が内分泌学の基礎的研究のため米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に留学された（二年間）。学会関係では昭和四十年北日本学会を主催され、昭和四十一年関塚正昭講師が特別講演を担当し「産婦人科領域におけ

る脈管造影法の応用」と題して発表した。

昭和四十二年病棟移転の一環として西病棟にあった婦人科が外来棟を経て東病棟へ、玄関棟にあった産科が東病棟へ移転し、中央手術場であった玄関棟へ出産部が新設された。その後出産部の整備、婦人科病棟診察室の改築等行われ研究室共々一層充実した教室が築かれた。同年半藤保助手が生殖生理学研究のためUCLAに留学された（一年間）。学会においては世界産科婦人科学会、アジア産科婦人科学会をはじめとして、排卵をめぐる諸問題についての研究、子宮癌の放射線療法における骨髓末梢血への影響等多数発表された。また昭和四十三年北日本学会で岡田正俊非常勤講師が特別講演を担当し「産婦人科領域における染色体異常」と題して発表した。

この時期より各地に大学紛争が発端し、昭和四十三年十一月新潟大学本部占拠、四十四年七月全共闘による第一・三内科封鎖等医学部混乱期にあたり教室としても難渋した時であったが、教授以下教職員一同よくまとまり、鈴木教授が四十四年日産婦学会特別講演「人工排卵についての基礎的臨床的観察」、日本不妊学会特別講演で染色体異常について発表された。

昭和四十五年八月鈴木教授は東北大学医学部産科婦人科教授となられ、四十六年三月新潟大学教授を退任されるまで兼任された。昭和四十五年七月鈴木正彦助教授が杏林大学医学部産科婦人科教授として赴任された。鈴木教授退任時に在局した医局員は二四名であった。また、研究の足跡を追ってみると学会発表五二二回、国際学会発表一四回、全国レベルの学会特別講演五回、





病室回診

病室回診風景



病室廊下にて小カンファレンス

病室廊下にて小カンファレンス



中央手術室にて

中央手術室にて

S46年同窓会会報より



医局旅行集合写真、S41年同窓会会報より



S42年運動会仮装、佐々木繁先生より



運動会仮装、S41年同窓会会報より



42年度秋季医局旅行  
42.10.16. 於 湯沢白銀園  
贈 和光堂

S42年医局旅行集合写真、佐々木繁先生より



S46年1月、鈴木教授転出時



S46年2月、鈴木教授送別パーティ、山田昇先生より



(集合写真、前列中央右に鈴木教授、撮影日不明)

竹内正七教授時代（昭和四十六年三月から平成元年三月）

（一九七二—一九八九）

竹内教授は教室員との対話、教室の和を重視され、ライフワークである産婦人科領域における免疫学的研究を中心に免疫学的、病理学のおよび内分泌学的研究の組織作り、研究室の整備、卒後教育を



竹内教授

含む教育システムの確立に精力的に取り組まれた。診療部門においても新患、産婦人科再来に加え特殊外来として特殊産科、新生児、内分泌、不妊、腫瘍予防・予後外来等の現在の外来体制の基盤となる体制の整備新設が行われた。

臨床面では特に絨毛性疾患の地域登録は現在でも高い評価を得ている。人事面では、昭和四十九年（一九七四年）には広井正彦助教授が山形大学医学部産科婦人科教授として、昭和五十年（一九七五年）には本多達雄講師が新潟大学医療短期大学部教授として、昭和五十九年（一九八四年）には半藤保助教授が香川医科大学母子科産科婦人科教授としてそれぞれ赴任された。以下各年毎の変遷をまとめた。

昭和四十六年（一九七一年）、年厚生省絨毛癌研究班の班長として第一回絨毛癌の病因とその適正取扱いに関する研究会の会議を主催され、県公衆衛生課と共同し県内の絨毛性患者の登録制および予後管理を行うこととなった。人事面では、北日本学会特別講

演で「胎児管理へのアプローチ」を担当された本多啓講師が杏林大学医学部産科婦人科助教授として赴任され、広井正彦講師が教室の助教授に昇任された。この着任期に竹内教授以下二十六名の常勤医局員が研究・診療・教育に精進した。

昭和四十七年（一九七二年）、竹内教授は北日本学会を主催され、日本不妊学会シンポジウムで広井助教授が「機能性不妊—内分泌生殖免疫学的アプローチ」と題し講演された。同年産婦人科婦長として三十五年間の長きにわたり活躍された榎谷ミネ婦長が退職された。中山教授時代創刊された機関誌「産婦人科の臨床」が竹内教授、同窓会諸先生方の努力により、日産婦学会新潟地方部会ならびに日本母性保護医協会新潟支部会の独立した合同機関誌として十二月新潟地方部会誌と命名創刊された。

昭和四十八年（一九七三年）、研究面において絨毛性腫瘍に関する研究に力がそそがれ、国際免疫学会で竹内教授が「反復奇胎患者および習慣性流産患者夫婦リンパ球混合培養」、世界産科婦人科学会で広井助教授が「絨毛のホルモン産生能」、北日本学会シンポジウムで千村哲朗講師が「胎児切迫仮死に対する管理」、日本不妊学会シンポジウムで高橋威非常勤講師が「免疫学的観点よりみた流産の成因」と題し講演され、内外において注目を集めた。診療面において外来の細分専門化と各種疾患に対して診療の本化をするため遺伝および超音波外来が新設され、当教室の産婦人科診療指針の初版が刊行された。

昭和四十九年（一九七四年）、日産婦学会シンポジウムで竹内教授、半藤講師が「絨毛性腫瘍の発症と予後—われわれの提唱す

る本体論の立場から」と題し講演された。診療では各外来に専属の医師が決められ、卒業教育として毎週の症例検討会を行うほか、適宜研究発表等が開かれた。人事では広井助教授が山形大学医学部産科婦人科教授、千村講師が同助教授として赴任され、半藤講師が助教授に昇任された。また、研究室が木造の研究棟から新築の鉄筋建東研究棟二階に移転し医局の大整備が行われた。

昭和五十年（一九七五年）、日本母性衛生学会を主催され、半藤助教授が「新潟県における絨毛性腫瘍の登録の管理」を特別講演され、日本輸血学会で富田哲夫非常勤講師が「児の予後よりみた交換輸血適応基準および輸血量に関する研究」、北日本学会で布川修非常勤講師が「経口避妊薬に関する基礎的並びに臨床的研究」と題しシンポジウムを担当された。人事面では本多達雄講師が新潟大学医療短期大学教授に赴任された。また初版の産婦人科治療指針が一部改訂された。

昭和五十一年（一九七六年）、北日本学会教育講演「産科免疫学序説」、昭和五十二年日本臨床免疫学会シンポジウムで「産婦人科とMHC」を担当された。また樋口正臣先生が腫瘍免疫学の研究のため米国UCLAに留学された（三年間）。診療面では昭和四十二年以来出産部と呼称されていたが、文部省の認可がおりて分娩部と改名独立した。

昭和五十三年（一九七八年）、東病棟三階にあった婦人科が改築された西病棟に移転した。新潟大学医学部附属助産婦学校が閉校され、医療技術短期大学の助産学専攻科として設置された。学会では、日本癌治療学会ワークショップで竹内教授が「絨腫治

療の問題点と診断基準」、北日本学会シンポジウムで佐藤芳昭非常勤講師が「妊娠と心疾患の臨床的背景、特に胸部外科手術後とエコーカルディオグラムによる心予備力の検討について」と題し講演された。

昭和五十四年（一九七九年）、竹内教授は日産婦学会で「癌治療における免疫学的背景の問題点」を特別講演され、日本化学療法学会シンポジウム「免疫療法」を担当された。また世界産科婦人科学会が東京で開催され、竹内教授は学術集会委員長として活躍され当教室の絨毛性疾患の管理、悪性腫瘍における化学、免疫療法に関する研究は高く評価された。同年北日本学会を主催され、高橋講師が「流産の臨床的免疫学的研究」の特別講演、徳永昭輝非常勤講師が「抗HBヒト免疫グロブリン投与によるHBウイルスの母児感染予防及び投与基準」と題しシンポジウムを担当された。

昭和五十五年（一九八〇年）、病院大型改修に伴い産科病棟のあった東病棟の改築が始まり一時ベッド減となった。学会においては国内外で妊娠および絨毛性腫瘍の免疫学的研究、原因不明不妊患者の免疫学的研究、絨毛疾患患者の管理予後、切迫流産の研究等多数の発表がなされた。また「胞状奇胎の適正管理による絨毛癌の発生予防に関する研究」で新潟日報文化賞を授与された。同年金沢浩二講師が絨毛性腫瘍の研究のため英国へ、田中憲一助手が米国立衛生研究所（NIH）に留学された。

昭和五十六年（一九八一年）、東病棟の改築に伴い玄関棟にあった分娩部の東病棟への移転、産科の整備および異常新生児室の新

設がなされた。五月日産婦学会が中山（第三代）教授が主催されて以来、新潟の地で竹内教授のもと開催された。会長講演で「産婦人科と生殖免疫学」、金沢講師がシンポジウムで「婦人科領域悪性腫瘍の化学ならびに免疫療法の諸問題について」、佐藤非常勤講師が教育講演で「産婦人科領域における癌胎児蛋白の基礎と臨床」と題し発表された。また竹内教授はフィリピン産婦人科学会の招請を受け絨毛性疾患について講演された。十一月産婦人科教室七十周年、竹内教授開講十周年記念行事が盛大に催された。

昭和五十七年（一九八二年）、文部省科学研究費で「日本ザルにおける実験的胞状奇胎の作成に関する研究」が承認され、産婦人科領域における免疫学的アプローチをテーマに研究面において一層の発展がなされた。竹内教授は世界産科婦人科学会および第一回国際絨毛性会議において、絨毛性腫瘍に関して免疫学的分類および管理、発生率について、日本不妊学会で「不育症をめぐる免疫学的問題」と題し、特別講演された。新潟においては産婦人科領域の地方部会、各種研究会が成功理に開催され、臨床医を対象に日々進歩する産婦人科診療の最新情報を討論する夏期セミナーが新設された。人事では高橋完明先生が胎盤プロラクチンの基礎研究のため米国NIHに留学された（二年四ヶ月）。

昭和五十八年（一九八三年）、外来棟改修工事が終了し、旧分娩部にあった臨時外来が新外来棟に移転した。外来整備と相俟って、思春期の男女女子を対象に婦人科疾患に限らず精神面における問題を検討する窓口として佐藤講師を中心に思春期外来が新設された。研究面では、竹内教授が英国免疫学会で「胞状奇胎の免疫

を招請講演、アジアオセアニア産科婦人科学会で自主作成したビデオフィルム腹式広汎性子宮全摘術を供覧し、「絨毛性腫瘍の成因」を招請講演された。また金沢講師が日本臨床免疫学会シンポジウムで「産婦人科領域における癌免疫療法について」、小幡憲一郎非常勤講師が北日本学会特別講演で「胞状奇胎の形成過程に関する臨床免疫病理学的研究」、大野雅弘非常勤講師が日本不妊学会シンポジウムで「着床をめぐる免疫学的研究」、湯沢秀夫助手が日本低温医学研究会シンポジウムで「婦人科癌治療における自家骨髓移植療法」と題し講演された。同年八月に国際生殖免疫ワークショップが新潟で開催され、内外より著名な生殖免疫学者が十余名来新し、活発な討論があり教室の研究も高く評価された。

昭和五十九年（一九八四年）、絨毛性腫瘍に関する研究、産婦人科病理学に長年とりくまれていた半藤助教授が香川医科大学母子科産科婦人科教授として赴任された。診療面では多様化に伴い外来における癌患者維持化学免疫療法の管理のため、維持化学療法外来が新設された。竹内教授は、日産婦学会常任理事、日本癌治療学会理事、日産婦学会絨疾登録委員会委員長、アジアオセアニア産科婦人科学会癌委員会委員長等の要職において精力的に活躍され、学会では、アジア産科婦人科学会で「進行子宮頸癌の化学療法」を教育講演、国際生殖免疫シンポジウムで「妊娠と癌における免疫生着反応」を招請講演された。同年梶野徹助手が生殖免疫学研究のため英国に留学された（一年間）。

昭和六十年（一九八五年）、婦人科癌化学免疫療法および生殖

免疫学を中心に研究されてきた金沢講師が助教に、小幡非常勤講師が講師に昇任された。この年も教室から国際学会、全国学会へ多数の発表がなされ、名実ともに国際的舞台においても活躍がなされる教室となってきたと思われる。

昭和六十一年（一九八六年）、研究会「免疫のつどい」を基にして、生殖免疫における最先端の研究に携わる基礎学者、臨床家により日本医学生殖免疫学会が設立された。竹内教授は初代会長に選ばれ、第一回学術集会を開催した。高桑好一先生がシンポジウムで「不育症への免疫学的アプローチ」と題して発表した。他、竹内教授は第九回産婦人科マイクロサージェリー研究会および第二十六回日本産婦人科内視鏡学会を主催した。また第十五回日本産婦人科病理・コルポスコピー学会を主催し、小幡憲一郎先生がシンポジウム「子宮頸部腺癌をめぐる諸問題」と題し講演した。また吉沢浩志先生が第三十四回日本産科婦人科学会北日本連合地方部会特別講演で「極小未熟児の予後から見た周産期医学のあり方に関する研究」と題し講演した。この年より国家公務員が四週六休体制となり、土曜日が隔週で休診となった。

昭和六十二年（一九八七年）、竹内教授は第八回日本産婦人科妊娠中毒症研究会を主催した。臨床面では、不妊症治療において腹腔鏡下配偶子卵管移植（GIFT）が実施に移され、妊娠例が得られた。また、分娩部・NICUにおいて、在胎二十四週〇日で出生した五三四グラムの超低出生体重児の救命例も誕生するなど、母体搬送を中心とした周産期管理の充実が図られた。同年三宅崇雄先生が生殖内分泌、特に体外受精も含めた不妊症治療の研

究のため米国（ベイラー大学）へ留学した（二年間）。また医局員が診療の拠り所としている教室独自の「教室診療指針」改訂第三版が作成された。

昭和六十三年（一九八八年）、竹内教授は第二十六回日本癌治療学会を主催、約五千名の参加者を得て、会長講演「癌の特異的免疫療法へのアプローチ——トロホプラストの免疫的逃避機序の示唆するものから——」と題して講演を行った。また、パネルディスカッションにて金澤浩二助教授が「化学療法によって治癒が期待される婦人科癌——絨毛癌と卵巣癌——、田中憲一先生が「CTL誘導時における腫瘍細胞上のクラスⅠ抗原の意義と臨床応用」、湯沢秀雄先生が「卵巣癌治療における second look operation の意義」と題してそれぞれ発表した。臨床面では、TIL療法 of 臨床応用が学会で注目され、NHKテレビの特集サイエンスQ「がん細胞消滅の一瞬」切り札になるか？免疫療法」で取り上げられた。また体外受精・胚移植法（IVF-ET）が実施に移され、更に体外受精における受精卵凍結保存および臨床応用が全国に先駆けて医学部倫理委員会で承認を得るなど、マスコミの注目を集めた。

平成元年（一九八九年）三月、十八年にわたって教室を主宰され、指導学位論文七十五編等数多くの子弟の育成、教育に情熱を注がれ、絨毛性疾患の地域登録管理など地域医療に密着した臨床的研究から「がんと妊娠」を対比した生殖免疫学的研究や国際学会発表三十五回など、枚挙にいとまがないほどの業績を挙げられる。刊行医学書（分担を含む）についても、新免疫学叢書（移植

免疫)、現代産科婦人科学大系(分担多数)、産婦人科シリーズ(婦人科癌検診のすべて、流産のすべて、胞状奇胎のすべて)、産婦人科ムック(分担多数)、図説臨床産婦人科講座(分担多数)、産婦人科医による遺伝相談、臨床産婦人科手術全書(産科婦人科の基本手技)、現代外科手術学大系(性器の手術)、新臨床外科全書(絨毛性腫瘍と管理)等多数執筆されている。まさに獅子奮迅の大活躍をされた竹内教授は平成元年三月定年退官され、帝京大学生物工学研究センターに研究の場を移された。



竹内正七教授歓迎祝賀会 昭和46年3月29日 於 ホテル新湯

S46年3月、竹内教授歓迎パーティ、山田昇先生より



旧研究棟お別れ会 昭和49年3月

旧病棟お別れ会、竹内正七教授退官記念誌より



(撮影日不明、前列左より鈴木雅洲先生、竹内正七先生、後列左より廣井正彦先生、鈴木正彦先生、半藤保先生、本多達雄先生)







仮装「タケチャンマン」 昭和63年5月

S63年5月、運動会仮装、竹内正七教授退官記念誌より



竹内正七教授最終廻診記念 平成元年3月28日

H11年3月、最終回診記念、竹内正七教授退官記念誌より

田中憲一教授時代（平成元年八月から平成二十二年現在）

（一九八九～二〇一〇現在）

平成元年（一九八九年）八月、教室の田中憲一講師が第六代教授に就任された。田中教授は教室での歴史上初の同窓生え抜き教授であり、米国立予防衛生研究所に六年間留学し、腫瘍免疫学・分子生物学を研究され、腫瘍内浸潤リンパ球を用いた抗癌免疫療法を臨床応用された。世界の一流科学雑誌に多数の論文発表を行っており、その圧倒的な研究業績が高く評価された。教授就任後も家族性卵巣癌の集積による卵巣癌の遺伝子診断、カチオニックリポソームをベクターとした卵巣癌の遺伝子治療などの研究、遺伝子不安定性の機能解析及び遺伝子変異推測モデルの構築による乳癌卵巣癌ハイリスクキャリアーの同定と発症予防法の確立に関する研究、ゲノム全域関連解析による子宮内膜症感受性遺伝子の同定、HIV感染男性非感染女性夫婦に対するHIV除去精子を用いた体外受精・胚移植の臨床研究等を行い、産科婦人科のあらゆる領域の研究体制を整え、最新の実験装置の設置等精力的に研究の基盤を築かれた。以下、各年毎の変遷とまとめた。

平成元年（一九八九年）、佐藤芳昭先生が第三十回日本母性衛生学会解説講演「米国における思春期の問題点——日本との対比において——」、本間滋先生が第三十回日本産科婦人科学会北日本連合地方部会特別講演「着床部における母児間の免疫的相関に関する研究——腫瘍組織との対比も含めた免疫組織学的アプローチ」と題してそれぞれ講演した。織田和哉先生が生殖内分泌や不妊症

治療の研究のため米国（ベイラー大学）およびカナダ（ブエルフ大学）へ留学した（三年間）。また同年、長年にわたり産婦人科病棟病長として尽力された栗山君枝氏が退職され、後任に渡辺美登里氏が新病長に就任した。

平成二年（一九九〇年）、田中教授は第十八回日本産科婦人科学会北陸連合地方部会特別講演「腫瘍内浸潤リンパ球の抗腫瘍活性について」と題して講演し、他にも第三十八回日本輸血学会、第六回日本皮膚悪性腫瘍学会など、多数の学会にて特別講演を行った。同年上田宏之先生が細胞の癌化におけるウイルスの関与に関する研究のために米国（アメリカ赤十字Jerome Holland Laboratory）に留学した（三年間）。

平成三年（一九九一年）、田中教授は第百四回日本不妊学会関東地方部会を主催した。第十八回日本母性保護医協会全国大会が新潟で開催され、金澤助教授が教育講演「卵巣癌治療における臨床的諸問題」を担当した。また金澤助教授は第九回絨毛性疾患研究会シンポジウム「部分胎奇胎の診断基準について」と題して発表した。同年、青木陽一先生が腫瘍免疫研究のために米国（ハーバード大学マサチューセッツ総合病院）に留学した（三年間）。この年より病棟が産科・分娩部と婦人科に分かれ、婦人科病長に松本明子氏が就任した。

平成四年（一九九二年）、金澤助教授が琉球大学医学部産科婦人科学教室の教授に赴任され、吉沢講師が助教授に昇任した。同年土曜閉庁が本施行され、土曜日の外来が完全に休診となった。

平成五年（一九九三年）、田中教授は厚生省研究班「遺伝性代

謝病の胎児期遺伝子治療を行うための基礎的研究と技術開発」を組織し、レトロウイルスベクターを用いた胎児期遺伝子治療の基礎研究を開始した。また第二十一回日本産科婦人科学会北陸連合地方部会及び第四十一回日本産科婦人科学会北日本連合地方部会を主催し、児玉省二先生が特別講演を行い「悪性卵巣腫瘍治療の現状と展望——疫学、臨床病理、集学的治療の検討——」と題し講演した。第十七回日本臨床遺伝学会を本多医療短期大学教授が主催し、吉沢助教授が特別講演を行い「NICUと先天異常」と題し講演した。倉林工先生は第八回日本更年期医学会シンポジウムにて「骨量減少の診断と治療——婦人科の立場から——」と題し発表した。外来部門では、更年期障害や骨粗鬆症などを対象とした「いきいき外来」を開設した。

平成六年（一九九四年）、田中教授は日本医師会医学研究助成を授与された。また新潟大学医学部公開講座「老年期をいききと過ごすために——閉経前後からの婦人の健康管理」を担当した。吉沢助教授が医療技術短期大学看護学科教授に転出され、児玉講師が助教授に昇任した。高桑先生が第三十九回日本不妊学会シンポジウムで「自己抗体陽性不育症患者に対する柴苓湯の効果」と題して発表した。同年、藤田和之先生がホメオボックス遺伝子の研究目的に米国（アメリカ赤十字 Jerome Holland Laboratory）に留学した（二年間）。

平成七年（一九九五年）、田中教授は厚生省研究班「シバヤギ胎仔肝細胞に対する子宮内遺伝子導入の試み」を組織し、リポソームを用いた遺伝子導入実験を行った。また周産期臨床分野で

も、分担研究「早産の予知・予防に関する研究」を担当した。高桑先生が第四十回日本不妊学会ワークショップにて「自己免疫陽性不育症に対する治療」と題して発表した。同年倉林先生がピタミンD受容体およびエストロゲン受容体遺伝子多型と骨代謝の関係についての研究目的にオーストラリア（セントビンセント病院）（一年間）へ、また相田浩先生がB細胞の増殖・分化の研究目的に米国（ハーバード大学マサチューセッツ総合病院）（一年間）へそれぞれ留学した。臨床面においては、重症男性不妊症に対する卵細胞内精子注入（顕微受精、ICSI）の臨床応用を開始した。

平成八年（一九九六年）、田中教授は文部省科学研究費基盤研究「連鎖解析による上皮性卵巣がん関連遺伝子領域の特定と構造決定」を開始し、家族性卵巣癌における原因遺伝子の検索を開始した。また厚生省分担研究「ハイリスク分娩の予防と妊娠健康診査のあり方に関する研究」、また「生涯を通じた女性の健康支援事業」の一つとして全国五カ所に計画されていた不妊専門相談センターが当院に設置され、臨床面でも精巣上体精子により、無精子症の男性からの妊娠・分娩に成功するなど、腫瘍分野の他に周産期や生殖医療分野での研究や臨床面での体制も充実してきた。第四十四回日本産科婦人科学会北日本連合地方部会にて、吉谷徳夫先生が特別講演「自家末梢血幹細胞移植による婦人科化学療法」、倉林先生は市民公開講座で「これからの人生をいきいきと生きるために」と題してそれぞれ講演した。同年倉田仁先生が造血幹細胞の増殖分化に関する研究目的に米国（ニューヨーク血液

センター)へ留学した(一年間)。

平成九年(一九九七年)、田中教授は厚生省がん克服戦略研究事業としての「家族性卵巣がん関連遺伝子の分離と遺伝子診断による早期診断法の確立」研究班を主催され、以後三年間でBRCA1に続く家族性卵巣癌に関連する新規原因遺伝子の存在を示唆した。また、「子宮内膜症を有する不妊症の治療に関する研究」を分担当された。高桑先生が第四十九回日本産科婦人科学会生涯研修プログラムレクチャーシリーズ「着床機序より不妊症・不育症にせまる 免疫的視点からみた不育症の診断と治療」第十八回日本妊娠中毒症学会シンポジウム「妊娠中毒症病態へのアプローチ」において「免疫的液性因子の関与 ―特に自己免疫因子を中心として」を担当した後、生殖免疫学研究のため英国(リバプール大学)へ留学した。

平成十年(一九九八年)、田中教授は文部省科学研究費基盤研究「分子生物学的解析による家族性卵巣がんの第一次予防法の開発及び確立に関する研究」研究班を組織し、BRCA1、BRCA2に続く原因遺伝子の新たな検索を開始した。厚生省の分担当研究「子宮内膜症合併不妊患者に対する治療法の開発」やエイズ対策研究事業の分担当研究も担当した。人事では高桑講師が助教授に昇任した。富田雅俊先生が第十三回日本更年期医学会シンポジウムにて「ビタミンD・エストロゲン受容体遺伝子多型と骨密度」と題してそれぞれ発表した。同年八幡哲郎先生がエストロゲン受容体のcoactivatorのMSG遺伝子機能の研究のため、米国(ハーバード大学マサチューセッツ総合病院)に留学した(三年間)。

平成十一年(一九九九年)、田中教授開講十周年記念祝賀行事を開催、「家族性卵巣癌の基礎と臨床」と題して講演した。高桑助教授が第四十七回日本産科婦人科学会北日本連合地方部会特別講演「異常妊娠と自己免疫 ―基礎的、臨床的検討―」を、第九回腎と妊娠研究会教育講演「抗リン脂質抗体と妊娠」と題して講演を行った。また教室独自の「産科婦人科診療指針」を大幅に改訂し第四版を発行した。臨床面では外来部門に特殊不妊外来(男性不妊外来)を開設した。婦人科病棟婦長として八年勤務された松本明子婦長が定年退職され、後任婦長として荒瀬原明子氏が就任した。

平成十二年(二〇〇〇年)、田中教授は文部省科学研究費基盤研究「検診・治療システム確立を目指した家族性卵巣癌関連遺伝子分離・解析に関する研」を開始した。厚生省がん克服戦略研究事業「SNPs (Single Nucleotide Polymorphism) を用いた関連解析による家族性卵巣癌関連遺伝子の分離と解析」研究班長として二年間主催し、その成果の一部をドイツミュンヘンで開催された第六回日独産科婦人科シンポジウムで発表した。他にも、エイズ対策研究事業「妊産婦のSTD及びHIV陽性率と妊婦STD及びHIVの出生児に与える影響に関する研究」、ヒトゲノム・再生医療等研究「子宮内膜症病態解明を目的とした罹患同胞対連鎖及び患者・対照群相関解析を用いた遺伝学的研究」研究班をとともに三年間主催した。同年周産母子センターが附属病院中央診療部門として独立、初代センター部長として田中教授が併任、また倉林講師が助教授昇任するとともに同センター副部長に就任し

た。

平成十三年（二〇〇一年）、田中教授は文部科学省科学研究費基盤研究「卵子成熟のためのFSH受容体遺伝子導入顆粒膜細胞を用いた遺伝子治療の基盤的研究」にて、遺伝子治療を用いた顆粒膜細胞との共培養による卵子の体外培養の研究を開始した。臨床面では附属病院の新病棟が完成し、産科および周産母子センターが西館五階病棟に移転した。また不妊症患者に増加に伴い、不妊内分泌外来を従来の午前中のみならず、午後にも拡大した。また前年度開始した厚生労働省エイズ対策研究におけるHIV感染男性非感染女性夫婦に対するHIV除去精子を用いた体外受精・胚移植は、マスコミにも取り上げられ注目を浴びた。

平成十四年（二〇〇二年）、田中教授は厚生労働省がん克服戦略研究「3p22-p23領域におけるSNPs相関解析を用いた家族性卵巣癌関連遺伝子の単離と解析」を二年間、エイズ対策研究「若年婦人におけるHIV感染状況およびHIV感染と生殖医療との関連」を三年間主催した。高桑助教授が第十六回日本エイズ学会シンポジウム「女性HIV感染者のマネージメント 妊婦にも急増のきざし」―我が国のSTD」、倉林助教授が第四十七回日本不妊学会シンポジウム「PCOSと不妊治療のデベイト」において「PCOS薬療法の不応例の治療」をそれぞれ担当した。また同年教室の歴史上初めて女性入局者が男性を上回った。それに伴い、女性専用のロッカーームを設けるなど、女医のためのアメニティの充実を他科に先駆けていち早く図った。

平成十五年（二〇〇三年）、高桑助教授が第五十五回日本産科

婦人科学会クリニカルカンファレンスにて「不育症の病態解明と治療の展望 凝固線溶系の視点から」と題して、青木先生が第五十一回日本産科婦人科学会北日本連合地方部会特別講演「子宮頸癌に対するNeoadjuvant chemotherapy」と題して講演した。また倉田先生が英国（インペリアルカレッジロンドン）へ、また石井桂介先生が胎児鏡手術の研修のために米国（フロリダ胎児診断治療研究所）（半年間）へそれぞれ留学した。臨床面では外来部門に悪性腫瘍による痛みのケアや心のケアを行う「緩和ケア外来」を新設し、通常の外来ではなかなか時間がとれない中、患者様とゆっくり色々な相談ができるような体制を整えた。婦人科病棟では荒瀬原明子師長が第一内科に異動され、後任師長として風間真理子氏が就任した。

平成十六年（二〇〇四年）、田中教授は厚生労働省第三次対がん総合戦略研究「がん医療経済と患者負担最小化に関する研究」の中で、分担研究「産婦人科がんの疾病管理と費用に関する研究」を三年間担当した。他、子ども家庭総合研究「小児科産科若手医師の確保・育成に関する研究」の中で、分担研究「産科若手医師の確保・育成に関する研究と提案」を三年間担当した。また第四十九回日本不妊学会シンポジウム「ARTのQuality Assurance」の中で、「日本産科婦人科学会と生殖医療」と題して講演した。高桑助教授はドイツベルリンにて開催された第八回日独産科婦人科シンポジウムに「Studies on the compatibility of HLA-Class II genotypes and phenotypes in patients with unexplained recurrent abortion in Japanese population」と題し

て発表した。臨床では、石井桂介先生が第二十七回日本産科婦人科M E学会シンポジウムにて「胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術の適応とT T T Sの術前後評価」と題して発表し、双胎間輸血症候群に対する子宮内レーザー治療を開始した。

平成十七年(二〇〇五年)、高桑助教授が病院教授に就任し、その直後に韓国ソウルで開催された第十九回アジア・オセアニア産科婦人科学会シンポジウムにおいて「Unexplained recurrent abortion: Immunologic background and efficacy of immunologic treatment」と題して発表した。また岡田潤幸先生が第五十回日本不妊学会シンポジウム「精子形成における分子生物学的解析と臨床からのアプローチ 精巣組織における遺伝子発現解析およびDNA相関解析による乏精子症の解明」と題して発表した。関根正幸先生がBRCA1遺伝子機能解析研究のため米国(ベスイスラエル病院)(二年間)へ、芹川武大先生が子宮体癌細胞におけるシグナルトランスダクション研究のため米国(ハーバード大学マサチューセッツ総合病院)(二年間)へ留学した。臨床面では、婦人科手術において早期子宮体癌症例に対する腹腔鏡下手術を導入した。診療面では新潟大学市医歯学総合病院新築工事の第二期工事が終了し、十二月三十日に婦人科病棟が旧病棟から産科病棟の一階下となる西館四階へ移転した。大学病院の診療に応じた成果主義がこの年から導入され、前年度の診療利益を上回った場合、あらかじめ宣言していたインセンティブの率に応じて各科に予算が配分され、機器購入などの資金が支払われる制度が導入され、コストを意識した診療が行われるようになった。また、医局

のホームページが大幅改訂され、毎月の外来担当医をホームページ上にのせる等、患者サービスへの配慮もより意識して行われるようになった。

平成十八年(二〇〇六年)、田中教授は第五十八回日本産科婦人科学会を主催した。同学会は産科婦人科学分野の最高峰の学会であり、学会会場固定化の試験期間の初年度にあたり、パシフィコ横浜において開催された。四日間にわたる学会には四千五百名余の産婦人科医が参加し、盛会であった。同学会において、田中教授は会長講演「婦人科分野における分子遺伝学的研究」、高桑病院教授は教育講演「不育症と自己免疫異常」をそれぞれ行った。また引続き開催された第九回日独産科婦人科シンポジウムでは、八幡哲郎先生、菊池朗先生、鈴木美奈先生がそれぞれサテライトシンポジウムにて発表した。その他にも、田中教授は六月に第二十四回日本産婦人科感染症研究会を主催、菊池先生がシンポジウム「歯周病と周産期予後」と題して発表、また十月には第二十七回日本妊娠高血圧症学会を主催し、高桑病院教授がシンポジウム「妊娠高血圧症候群の同種免疫的背景—夫婦間組織適合性抗原系の類似性に関する解析」、菊池先生が「歯周病と周産期予後—特に妊娠高血圧症候群と子宮内胎児発育遅延について—」を担当するなど、全国規模の学会を主催した。人事面では青木講師が琉球大学医学部器官病態医科学講座女性・生殖医学分野教授に就任した。研究面では、田中教授は厚生労働省エイズ対策研究「周産期・小児・生殖医療におけるH I V感染対策に関する集学的研究」の中の分担研究「H I V陽性男性、陰性女性夫婦に対する

る生殖補助医療の応用に関する基礎的・臨床的研究」を担当された。高桑病院教授は第十八回FIGO国際婦人科学産科学会においてシンポジウム「Studies on the association between unexplained recurrent abortion and genotype of human major histocompatibility complex antigens (HLA)」を発表した。臨床面では、婦人科では手術侵襲の少ない腹腔鏡下手術を積極的に行い、また産科ではスクリーニングエコーを充実させ、胎児診断を精力的に行った。

平成十九年(二〇〇七年)、田中教授は十月に第五十五回日本産科婦人科学会北日本連合地方部会を主催された。朱鷺メッセにおいて開催され、藤田講師が特別講演を行い「造精機能障害の臨床的評価と治療法に関する研究」と題して発表し、菊池講師がモーニングシンポジウムにて「New Knowledge in Perinatology: 歯周病と周産期異常」と題して発表した。また十一月に行われた日本産婦人科医会の市民公開講座にて高桑病院教授が「産婦人科専門医と語る市民フォーラム」のびよる性感染症・性に対する正しい知識を」と題して発表した。研究面では、田中教授が、厚生労働省第三次対がん総合戦略研究事業の研究分野3「革新的ながん予防法の開発に関する研究」内の「遺伝子不安定性の機能解析及び遺伝子変異推測モデルの構築による乳癌卵巣癌ハイリスクキャリアアの同定と発症予防法の確立」を主任研究者として三年間担当され、将来の乳癌・卵巣がんハイリスク症例の抽出に、遺伝子不安定性解析が有用であることを示された。また、田中教授は、国際医療協力研究「我が国の二国間保健医療協力と国際機

関、国際パートナーシップ及び他国の二国間協力との今後の連携の在り方について」の中で、「エイズ分野国際保健医療協力の国際連携について」を二年間担当された。

平成二十年(二〇〇八年)、田中教室は開講二十周年を迎えた。学会発表では八月に高桑病院教授が第二十六回受精着床学会において教育講演を行い「不育症の現場でのアプローチ」と題して発表し、十一月に八幡講師が第四十五回婦人科腫瘍学会におけるシンポジウムにて「卵巣癌に対する分子標的療法」と題して発表した。また八幡講師は日本婦人科化学療法研究機構(JGOG)の第十五回海外派遣者として選出され、Seoul National UniversityでのWorkshopにて「Current Status of Endometrial Cancer Treatment」と題して発表した。研究面では田中教授が担当されている分担研究「HIV陽性男性、陰性女性夫婦に対する生殖補助医療の応用に関する基礎的・臨床的研究」の一環として、田中教授および八幡講師が中心となり、「中空糸カラムを使用したHIV感染男性精液中からのウイルスの除去法」を新たに開発しNHKの「おはよう日本」をはじめとして全国紙にも多数紹介されマスコミでも広く話題となった。

診療面では、外来通院治療センターが開設され、婦人科癌の化学療法が日帰りに行うことが可能となった。また七月には全国で初めて初期子宮体癌に対する腹腔鏡下根治手術が先進医療として承認された。また一月から三ヶ月間、八幡講師が米国New YorkのMemorial Sloan Kettering Cancer Centerに臨床留学し「Robotic Surgeryや卵巣癌に対するradical surgery、子宮頸

癌に対する妊孕性温存手術（広汎子宮頸部摘出術）等の新たな技術を学んで帰国した。産科では数年前より行ってきた、胎児エコーを光ファイバー回線を使用してリアルタイムで大学医師が診断、助言を行ってきた胎児エコー遠隔診断の実績が認められ、新潟県の補助の下、県内七施設の医療機関とネットワークをつなぐことが可能となり、さらなる診断技術の向上と地域医療への貢献が期待されることになった。また、「胎児心超音波検査」が先進医療として承認され、小児科循環器専門スタッフとともに胎児心機能異常が疑われる妊婦管理が行われるようになった。また外来では、専門性を高めた高度な医療が提供できることを目標に、婦人科悪性腫瘍の鑑別診断を主目的とした「婦人科エコー外来」が、高年初産婦を対象とした「ルピナス外来」が新設された。また、婦人科において臨床病理検討会（CPC）の月一回の開催や、産婦人科一般に関する基本的な知識を学ぶ「ベーシックセミナー」の月一回の開催が開始され、卒後教育にも力が入られるようになった。

産婦人科病棟婦長として尽力された渡辺美登里氏が退職され、後任に荒木理恵氏が産科病棟新師長に就任した。

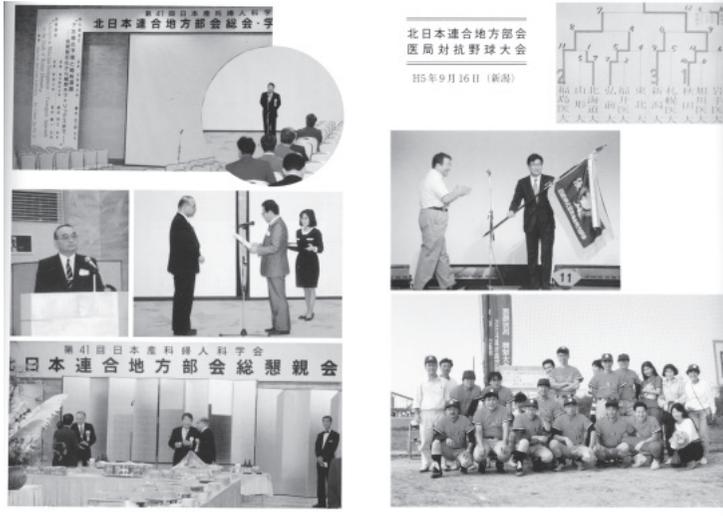
平成二十一年（二〇〇九年）、田中教授は七月に第四十六回日本婦人科腫瘍学会を主催され、朱鷺メッセを会場に開催された。初期研修医の学会費等を学会側で負担するとい田中教授の斬新なアイデアによる画期的な試みも手伝って千名を超える参加者を迎え盛大に行われた。同学会では、八幡講師が International

Symposium を担当し、「Obesity and Endometrial Cancer」と題して、西野幸治助教が Work shop を担当し「喫煙と子宮頸癌」と題して発表した。また三月に行われた第十九回腎と妊娠研究会において高桑病院教授が教育講演を行い「抗リン脂質抗体陽性不育症に対する治療に関する考察」と題して発表した。人事面では、高桑病院教授が十月より周産母子センター教授に就任され、国立大学では全国で初の周産母子センターの専任教授となった。研究面では、田中教授は文部省科学研究費基盤研究B「上皮間葉移行誘導の分子機構解析による上皮性卵巣がんの浸潤・転移の病態解明」研究班を組織し、卵巣がんの病態解明に尽力されるとともに、その研究成果を第六十八回日本癌学会、第百回、第百一回アメリカ癌学会で発表された。また文部科学省「個人の遺伝情報に応じた医療の実現プロジェクト（第二期）」内の「ゲノム全域関連解析による子宮内膜症感受性遺伝子の同定」を担当された。

平成二十二年（二〇一〇年）、新潟大学産科婦人科学教室は開講百周年を迎え、六月二十七日に百周年記念行事が行われた（記念行事については別記）。田中教授は七月に新潟大学医歯学総合病院生命科学医療センター長の中田光教授とともに第十六回日本家族性腫瘍学会を主催され、朱鷺メッセにおいて行われた。同学術集会では八幡講師がシンポジウムを担当し「日本人における遺伝性乳癌／卵巣癌」と題して発表した。また十月に行われた第二十五回日本更年期医学会において八幡先生が教育講演を行い「女性のライフサイクルと肥満」と題して発表した。臨床面では、

四月一日に新潟大学医歯学総合病院が、周産期医療に関して新潟県から「総合周産母子医療センター」の指定を受け、これに合わせて、これまでの「周産母子センター」が「総合周産母子医療センター」に改組された。施設設備はNICUが六床から九床に増床され、MFIUCU（母体・胎児集中管理病床）六床が新たに整備された。異常新生児の管理用病床についてはこれまでの継続保育用ユニット（GCU）十二床と合わせて二十一床となった。

MFIUCUは准個室ユニットが採用され、プライベートの保護にも注意が払われ、患者三名に対して看護師一名の手厚い看護体制がしかれるようになった。また七年間婦人科病棟婦長として尽力された風間真理子師長の移動に伴い、四月後任に佐竹紀代美氏が新婦長に就任した。人事面では七月に八幡講師が准教授に昇任した。



H5年9月、北日本連合地方部会新潟開催、H5年度同窓会会報より



新潟大学医学部産科婦人科学教室 田中憲一 教授就任 祝賀会 平成元年10月7日 於 ホテルイタリア軒

H1年10月、田中教授就任祝賀会、H1年度同窓会会報より

H9年5月、運動会応援の様子、  
H9年度同窓会会報より



H10年8月、新潟まつり民謡流し、  
H10年度同窓会会報より

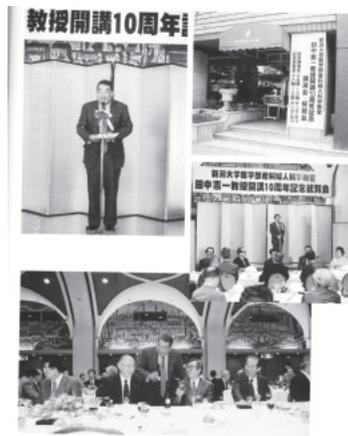


新潟大学医学部産科婦人科学教室 田中憲一教授開講10周年記念 平成11年7月17日 於 ホテルイタリア軒

H11年7月、田中教授開講10周年記念、H11年度同窓会会報より



H13年度、同窓会会報より  
旧病棟と当時完成した新病棟の様子



H11年7月、田中教授開講10周年記念  
H11年度同窓会会報より



H18年4月、  
日産婦学会を主催（横浜）  
H18年度同窓会会報より



学術講演会を前にして緊張のスタッフ一同



開会の挨拶をされる田中憲一会長

H18年4月、  
日産婦学会を主催（横浜）  
H18年度同窓会会報より



会長講演をされる田中憲一会長



H18年4月、日産婦学会、田中教授  
学会場内大嵐の下にて



H18年4月、日産婦学会、他大学先生方との会食にて、  
後列左2番目に田中教授



H20年度忘年会同窓会、田中教授就任20周年、  
高桑教授より目録贈呈



H20年度忘年会同窓会、田中教授就任20周年、  
金澤先生祝辞



H20年度忘年会同窓会、田中教授（左）と壇上に有波先生  
（万歳三唱の直前か）



## 歴代教授年表

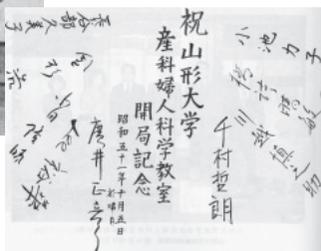
- 1910 (M43)/9～ 足立捨次郎 初代教授
- 1921 (T10)/8～ 上野道故 二代教授
- 1938 (S13)/7～ 中山栄之助 三代教授
- 1963 (S38)/8～ 鈴木雅洲 四代教授
  - 1970 (S45)/7 鈴木正彦 杏林大学医学部教授
- 1971 (S46)/3～ 竹内正七 五代教授
  - 1974 (S49)/4 廣井正彦 山形大学医学部教授
  - 1984 (S59)/4 半藤保 香川医科大学医学部教授
- 1989 (H1)/8～ 田中憲一 六代教授
  - 1992 (H4)/4 金澤浩二 琉球大学医学部教授
  - 2006 (H18)/4 青木陽一 琉球大学医学部教授
  - 2009 (H21)/10 高桑好一 新潟大学医歯学総合病院  
総合周産期母子医療センター教授



鈴木正彦先生、S45.7月～、杏林大学医学部教授



廣井正彦先生  
S49.4月～ 山形大学医学部教授





半藤保先生  
S59.4月～  
香川医科大学医学部教授



金澤浩二先生 H4.4月～ 琉球大学医学部教授



青木陽一先生 H18.4月～ 琉球大学医学部教授



高桑好一先生 H21.10月～ 新潟大学医歯学総合病院、総合周産期母子医療センター教授



記念植樹  
医学部東研究棟前

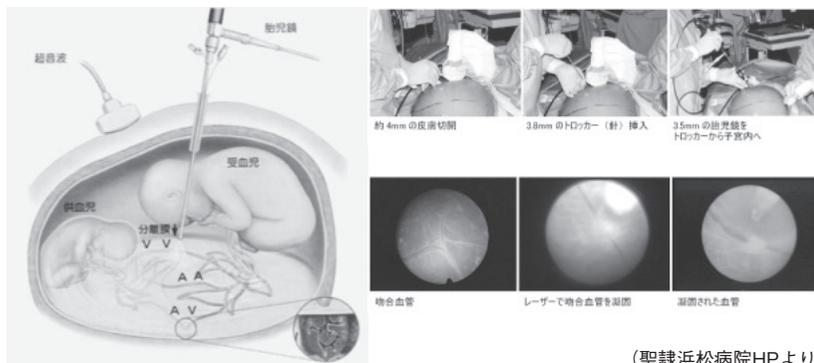




## 同窓会員の活躍（2）

聖隷浜松病院（鳥居裕一副院長（S48卒）、以下5名の同窓先生方）

胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー焼灼術（FLP）  
現在国内での施行症例は計300例を超えている



（聖隷浜松病院HPより）

新潟日報 H22/3/18  
にいがた医療最前線  
シリーズ「卵巣癌」

**医療最前線**

**国内で緩やかに増加  
細胞の特性分析し治療**

子宮内腺症と卵巣がんの合併率

年齢	卵巣内子宮内腺症(件)	卵巣がん合併数(件)	合併率(%)
20歳未満	40	0	0.00
20歳代	1,908	11	0.57
30歳代	3,450	45	1.29
40歳代	2,252	97	4.11
50歳代	415	91	21.9
60歳代	55	27	49.1

新潟大医学部産科婦人科診療科長  
田中 憲一 教授



現在の産婦人科医局入口付近  
（医学部東研究棟2F）

## あとがき

「新潟大学医学部五十年史」「新潟大学医学部七十五年史」「新潟大学医学部百年のあゆみ」に記載された教室の沿革、変遷をもとに、現在にいたるまでの産科婦人科学教室の百年間のあゆみを活字でつづった。

紙面の都合により、各教授時代にまつわる楽しい、心温まるエピソードを掲載できないのは残念であるが、新潟大学産科婦人科学教室「同窓会会報」に多数記載されているのでご参照いただければ幸いである。



## 産婦人科開講百周年記念講演会・式典

平成二十二年六月二十七日（日曜日）に、産婦人科開講百周年記念講演会・記念式典がホテル日航新潟で開催されました。当日はあいにくの雨となってしまいましたが県内外より一五〇名余の同窓の先生方にご参加をいただきました。ホテル日航での記念行事に先立ち、午後一時から新潟大学医学部構内において記念植樹式がとりおこなわれました。鈴木雅洲前教授、田中憲一教授、佐々木繁同窓会会長、田中義一先生に土かけを行っていただき、植樹式が終了しました。樹木はクロマツで産婦人科医局のすぐ下の植樹スペースの最前列の最も目立つところに産婦人科開講百周年記念と記した石碑とともに植えられていますので、是非一度ご覧になっていただければと思います。

雨中の植樹式の後、チャーターバスでホテル日航新潟へ移動し、全体の記念撮影後、午後二時から記念講演会が開催されました。まず田中憲一教授により開講百周年までのあゆみを、思い出すの写真を呈示しながらお話をいただきました。続いて武藤輝一元学長による講演会が行われ、産婦人科開講からこれまでの沿革を楽しくお話いただきました。

続いて記念式典が行われましたが、式典に先立って当日出席さ

### 研究棟



### 新入院病棟



れた同窓会在籍五十年以上の二十三名の先生方に、感謝状と記念品（佐渡無名異焼き湯呑み茶碗）が贈呈されました。表彰された二十三名の先生は以下の通りです。

田中義一先生、小山淑文先生、鈴木雅洲先生、初野弥一先生  
島野正規先生、高橋信二郎先生、斎藤金三郎先生

馬場一郎先生、吉川英世先生、鈴木正彦先生、荒川義衛先生  
堀 博先生、青木智先生、富樫哲太郎先生、山崎邦夫先生

村田房雄先生、山田昇先生、後藤司郎先生、村井 惇先生

星野茂夫先生、岡田正俊先生、廣井正彦先生、佐々木繁先生  
また、会場には

・過去の同窓会誌

・地方部会誌

・歴代教授写真＋それぞれの教授任期中の代表的写真

・初代足立捨次郎教授使用顕微鏡

・子宮頸管拡張器（大正八年（一九一九年）八月購入）

・レオポルド触診法掛軸（昭和十一年八月）

などが展示されました。

二時間の式典はあっという間に過ぎ、十七時に散会となりました。式典参加者には開講百周年の記念品として初代足立捨次郎教授のゆかりの顕微鏡写真入りのオリジナル扇子をお持ち帰りいただきました。

